

# MACC<sup>マツク</sup>通信

Monozukuri Arakawa City Cluster

第15号

2010年12月15日発行

荒川区が進める「MACCプロジェクト」は、荒川区の特徴である多彩な産業集積を活かした、区内企業同士の顔の見えるネットワークの形成を推進することで、荒川区の産業振興（商品開発や販路拡大など）を図ろうとするものです。「MACC通信」は、「MACCプロジェクト」に関わるホットな情報をお届けしていきます。

今回は「第5回MACCプロジェクト・フォーラム」（11月2日開催）、「あすめし会山形大学視察」（10月10日～11日実施）、「健康福祉ビジネス研究会の活動報告」等についてのトピックスです。

## 第5回MACCプロジェクト・フォーラムを開催

### 産学連携による地域産業活性化 山形大学工学部との連携 -

5周年を迎えたMACC（荒川区モノづくりクラスター）プロジェクトは、11月2日にサンパール荒川で、「第5回MACCプロジェクト・フォーラム」を開催しました。今回はプロジェクト推進の柱でもある「産学連携による地域産業活性化」をテーマに、特に荒川区と連携協定を結び、「荒川サテライト」を開設している山形大学工学部との連携に焦点を当て、今後の産学連携に関する講演や情報交換が行われました。

#### 事業推進の新たなステージへ

フォーラムの冒頭、西川太一郎区長があいさつし、「平成18年度にスタートしたMACCプロジェクトは5年の節目を迎えた。“顔の見えるネットワーク”を生かして商品開発や人材育成に関する取り組みが加速し、地域産業クラスターの自立的発展に向けた新たなステージに入っている。今日のフォーラムでは、「荒川サテライト」を開設して区内企業の支援を本格化している山形大学工学部との連携に焦点を当て、今後の産学連携のあり方などを探っていただきたい。中小企業にとって厳しい経営環境にあるだけに、区として新製品・新技術の開発、人材育成、販路開拓などに取り組む意欲ある事業者を精一杯支援していく。」と述べました。



あいさつする西川区長



会場の様子

#### (株)日興エボナイト製造所と 都立産技高専荒川キャンパスに感謝状

続いて、MACCプロジェクト表彰式が行われました。この表彰は、これまでのMACCプロジェクトの活動の中で、特に産学連携による新商品・新技術の創出に多大な貢献をされた支援機関と、新商品・新技術開発に積極的に取り組み、大きな成果を残した企業に対して、その功績を称えるものです。

今回は、支援機関部門では「東京都立産業技術高等専門学校（産技高専）荒川キャンパス」、企業部門では「株式会社日興エボナイト製造所」が選ばれ、それぞれを代表して産技高専の源雅彦教授（地域交流室主任）と(株)日興エボナイト製造所の遠藤智久代表取締役が西川太一郎区長から感謝状が贈られました。



表彰を受ける源教授



表彰を受ける遠藤社長

産技高専は、平成20年4月に荒川区と共催の技術交流会を開催した際、同校の施設・設備や研究内容を公開したことを契機として、平成21

年1月から荒川区と連携して「モノづくり技術向上支援事業」を開始しました。特にMACCプロジェクト会員企業との産学連携による新商品・新技術開発の支援に多大な貢献をされています。

(株)日興エポナイト製造所は、首都大学東京健康福祉学部の竹井准教授との産学連携によって徒手療法の補助器具「2WAY(ツーウェイ)セラウエッジ」を開発した後、MACCコーディネータの紹介による都立産業技術研究センターのデザイン講習で得た知見を生かして、新商品「エポナイト万年筆」を開発しました。この「エポナイト万年筆」は、多くの販売実績をあげています。また、代表取締役の遠藤智久氏は、若手経営者の会「あすめし会(明日の飯の種をつくる会)」の幹事を務めるなど、MACCプロジェクトの牽引役として活躍されています。

このあと、プログラム第1部では「山形大学との産学連携」の講演が行われ、第2部では産学連携に向けた交流会が開かれました。

#### 山形大学の紹介

講師：志村勉氏(山形大学大学院理工学研究科教授、荒川サテライト長)

山形大学工学部は、昼間コースの機能高分子工学科、情報化学工学科、機械システム工学科、電気電子工学科、情報科学科、バイオ化学工学科、応用生命システム工学科と、フレックスコースの



講師の志村教授

システム工学科があります。また、住民向け地域貢献や、学生の地元就職割合などを基にした大学の地域貢献ランキング(日経調べ)で、第7位にランクされています。

さらに山形大学は、産学連携に極めて積極的で、最近では次世代有機デバイスの頭脳を結集し、産学官一体の拠点と位置づけてシリコンから有機材料への「有機エレクトロニクス革命」に関する取り組みで話題を呼んでいます。

このように山形大学は、壮大な構想のもと有機EL(エレクトロルミネッセンス)、有機太陽電池、有機トランジスタの3分野に照準を定め、世界最高水準の研究拠点づくりに向けて、ノーベル賞級の頭脳を集めたドリームチームを結成するなど、次世代有機デバイスの研究開発を加速させています。

最近では、山形県から7年間連続で合計43億円の支援を得て、現在主流のディスプレイに代わる次世代技術の有機ELの研究開発を推進し、照明用パネルの合弁会社を設立し話題となりました。

荒川サテライトでは、まず区内企業との共同研究を推進していきます。荒川区では「産学連携研究開発支援事業」として、大学等と区内企業との共同研究に要した費用の一部を助成する支援を実施していますので、こちらを有効的に活用していきたいと考えています。また、企業との共同研究を推進するために、区からの委託事業として「中小企業技術・経営課題総合相談事業」を実施しています。区内企業は、技術・経営に関する相談を無料(原則)で受け取ることができます。さらに、今後は、マネジメントスクールを本格的に展開するなど、荒川区での展開を次のとおり考えています。

#### 荒川区での今後の展開

##### 大学院の設置

モノづくり技術経営学専攻(MOT)の一部講義の開講と独自のマネジメント教育プログラムの展開(顧客ニーズの確認後、平成24年度に開講予定)

##### 産学連携の拠点形成

荒川区及び周辺の企業に対する技術と経営の支援(欧米型の課題解決プロジェクト型・リエゾンオフィス)

##### 地域連携に向けたブリッジ&イノベーション

山形県及び米沢市周辺と荒川区の産業とのブリッジ機能と産業振興に向けたイノベーションエンジン

このように、山形大学の知的資産を活用して、荒川区の産業界、区内企業が新たな展開を積極的に図ることを願っています。

#### 山形大学の研究シーズの紹介

テーマ：テレロボティクスが変える

コミュニケーションとスキル

~人間の能力は空間と時間を超えられるか~

講師：妻木勇一氏

(山形大学大学院理工学研究科教授)

21世紀はロボットが工場から飛び出し、社会や一般家庭に進出する時代です。私たちの研究室では、テレロボティクスと呼ばれるロボットを遠隔操作するための技術を研究し



講師の妻木教授

ています。具体的には、ロボットを身に付けて歩くウェアラブルロボット(装着型ロボット)や人間の

動きをサポートするスキンケアロボット、ヒューマロイドロボットなど幅広い分野で活用できるロボットに関する技術開発をしているところです。その他に、高臨場視覚提示システムや人工的な力を提示するハプティックインターフェースなどの研究も行っていきます。

現在、コミュニケーションを図るツールとして、電話、携帯電話、メール、TV電話などがありますが、これにロボットテクノロジー(RT)を加えると、コミュニケーション・スタイルが変わってきます。ロボットに通信機能を持たせることで、空間を超えることができるというわけです。これこそ、テレオペレーション(遠隔操作)にロボティクスの技術を取り入れた体系です。

#### テレロボティクスとは

人間がロボットを遠隔操作するための工学。人間の能力を時間・空間的に拡張すると同時に、ロボットだけではできないことを可能にする技術でもある。

操作者に現地に居るかのような臨場感を提示するために、バーチャルリアリティ技術も重要になる。

注目を集めているバーチャルリアリティ分野の技術とロボティクスの技術を融合することで、ロボットを操作する人がより高い臨場感を持って、インタラクションが行えるようになります。テレロボティクスの技術は、さまざまな分野で応用されることが期待されています。例えば、宇宙のように距離が遠く離れた場所や原子力発電所のような人が近づき難い場所や空間にロボットを進入させて、作業を行うといったロボットの開発が進められています。

さらに、実用性の高い開発として、ロボットに人間の視覚情報を加えることでスキルを向上させ、不安定なシステムを安定に操作できるようになると考えられています。熟練技術者の技術や人間のスキルを蓄積し、製造現場の技術や匠の技術を未来に伝承することも可能です。

テレロボティクスは、まさにコミュニケーションとスキルの伝え方を変え、空間だけでなく時間を超える技術だといえます。医療、健康福祉、教育、エンターテインメントなどの様々な分野からも注目され、今後の有望な技術開発分野となるでしょう。山形大学では「次世代ロボットデザインセンター」でロボットテクノロジーを使った次世代の技術開発に取り組んでおり、これらの技術開発の産学連携も推進しています。

ぜひ、荒川区の企業とも共同で研究開発を進めたいと考えています。

#### 基調講演

テーマ：これからのものづくりと経営の視点

～平成・経済敗戦をチャンスに～

講師：柴田孝(山形大学 産学連携教授、山形大学国際事業化研究センター副センター長)

経営学者のドラッカー博士の言うように、日本は断絶の時代(転換期)にあります。1980年代までは、経済が成長する中で激動の時代を乗り切ってきましたが、1991年以降は経済が停滞



講師の柴田教授

し、時代を乗り切れなくなっています。戦後60年続いた社会システムから、今は、新しい成長軌道が模索されているときにあります。

この時代にあって、日本の企業は「創造する経営」が必要です。新興国が台頭し、円高、素材高が進行する中では、産業構造も企業経営も新しいものに転換していかなければなりません。その際、製造業は常に時代の主役ですが、その中心は同じ産業・業界ではありません。自動車や電機などの組み立て型産業が中心の時代は、すでに40年も続いており、転換期にあるのは明白です。

今、認識しなければならないことは「日本は経済敗戦の状態にある」という自覚です。もはや「大」が分解して「小」による再発信が始まっており、変化はすでに起きています。経済的衰退の中から創意工夫して、変化にすばやく対応できた者のみ生きながらえる時代にあることを肝に銘じなければなりません。

いまや企業経営は、中途半端ではやっていけません。徹底した低コスト化や、商品・サービスの強みの発揮が必要で、不振業界の金型産業の中にも成長しているメーカーはありますし、高級車のランボルギーニと同じくらいの価格のオーディオ製品を看板にして健全経営している電機メーカーもあります。

要は「生き残る方向性をどう見るか」です。それには「縮む日本経済、広がるアジア、早い産業転換、高齢化社会」という現況を直視して、付加価値を創り続けられるか、誰に何を売るか、マーケット機能・営業機能・人材育成機能をどう構築できるかがポイントになります。

問題は、中小企業や地域企業の対応です。概して、単独・単機能の体制では戦えないと思います。自社単独、単機能経営で生き残るのは極めて厳しい

のが現実です。

そこで提案したいのは、ネットワーク型クラスターの形成であり、地域マーケティング会社の考え方です。まずは、地域連携で企業の企画・営業機能を集約化し、地域を一つの企業と見なす。具体的に考えているのは、山形大学工学部の本拠地でもある米沢地域と、産学連携のモデルともなって情報通信産業が発展している福島県の会津・喜多方地域、そして荒川区との企業群の連携です。これらの3地域で生産・物流・販売までの業務を一貫して管理するSCM(サプライ・チェーン・マネジメント)のような企業連携を構築するという方法です。

東京都心に位置する荒川区の企業は、区内に本社を構えたまま、モノづくりや企画・営業は他地域で行う“ミニ荒川区”構想ということになります。各地域の強みを生かし、異文化の交流を図り、「つなぐ、重ねる、組み合わせる、補完する」という新たなイノベーション・ネットワークを形成することをお勧めしたいと思います。

一つのモデルを紹介すると、イタリアのポロニアの事例が参考になります。薬品産業を中核にしたパッケージングバレーといわれる産業クラスターを形成して、世界にその存在感を示しています。

日本と同じようにモノづくり大国を標榜するドイツでは、ITを駆使しながら、有効な地域ネットワークが構築され、産学連携が効果的に進められています。日本では、そうした視点に立った旗振り役が少なく影が薄いため、地域企業連携という認識も、産学連携も十分には進んでいないように思います。現状を直視し、荒川区の産業、企業の未来に向けて、お手伝いをしたいと考えています。

## 連携実績の紹介

テーマ：「あすめし会」の米沢視察研修報告  
報告者：高村朋希氏(MACCコーディネータ)

あすめし会は「明日の飯の種を創造しよう」という狙いで結成された若手経営者のプロジェクトチームです。新事業創出・新製品開発と次代の経営者の人材育成を主な目的とし、MACC会員企業の若手経営者や経営幹部のメンバー13名で構成されています。



高村コーディネーター

毎月1回の定例会議では、経営トップとしての資質を研さんする勉強やケーススタディ、討論などを行い、課題を整理しながら、活動を進めています。

活動は内部に止まらず、他地域の業界、企業との研修・視察等へも及んでいます。今年秋には、山形大学工学部のご協力をいただき、あすめし会のメンバーと米沢地区の企業が交流し、マッチングを図る機会を得ることができました。

これを機に、荒川区の企業と米沢地域の企業との新たな展開を期待しているところです。

## 【交流会】

全体会議の終了後、当日のフォーラムに参加した講師陣をはじめ、支援機関、MACC会員企業などが情報交流を行い、それぞれ歓談しました。

(報告者：萩原)



# 「あすめし会」が山形大学工学部(米沢市)を訪問！

「あすめし会」は平成22年10月10日・11日に、帝人人造絹糸株式会社(現・帝人)の元となった米沢人造絹糸製造所が生まれたことで有名な「山形大学工学部」を訪問し、山形大学の教授陣や地元米沢地域の企業との交流を行いました。

山形大学工学部は全国7番目(東京、大阪、京都、名古屋、熊本、仙台、米沢の順)の高等工業学校、「米沢高等工業学校」として明治43年3月に開設されました。昭和19年4月に米沢工業専門学校と改称され、更に同24年5月に学制改革によって山形大学工学部に改組となり、現在に至っています。また、旧米沢高等工業学校本館は重要文化財に

指定されています。山形大学工学部は2010年に創立100周年を迎え、伝統のイノベーションマインドをもって新たな100年に向かっての一步を踏み出そうとしています。

山形大学では機能高分子工学の「有機EL」、物質化学工学の「プラスチック成形・加工」、機械システム工学の「ロボット」といった研究分野に強みを

持っており、荒川区のモノづくり企業にとって、今後の技術相談や共同開発で大いに連携できる可能性があります。

ここで、各方面でご活躍された山形大学工学部の卒業生をご紹介します。

秦 逸三(1880年～1944年)

日本で初めて人造絹糸(レーヨン)製造に成功した科学者・実業家で帝国人造絹糸(テイジンの前身)共同設立者。わが国人造繊維生みの親、わが国レーヨン工業の草創者と言われている。

安西 浩(1901年～1990年)

ミスターエネルギーと言われ、都市ガスの原料を石炭 石油 LNGと世に先駆けて切り替え、エネルギー革命を推進した。元東京瓦斯会長。

田口 連三(1906年～1990年)

石川島播磨重工業を世界に羽ばたかせた。信条は「己れを捨て、働け」。元石川島播磨重工業会長。

吉本 隆明(1924年～)

戦後のわが国の思想界をリードした詩人・評論家で、戦後最大の思想家と言われる。吉本ばなの父親。

佐藤 安太(1924年～)

タカラ(現タカラトミー)創業者。だっちゃん、リカちゃん人形、チョコQ、人生ゲーム等の数々のヒット商品を開発。2010年86歳の高齢で大学院博士課程を修了。

山形大学、柴田教授・松田教授による講演と意見交換

「これからの中小企業の戦略について～荒川区と米沢地域の連携の可能性に関して～」というテーマで山形大学工学部柴田教授・松田教授が講演されました。講演では過去のデータを紐解きながら、現在の日本経済が置かれている状況や、少子高齢化を中心とした日本の将来像について言及しました。

また、現在目覚ましい経済発展を遂げているアジア・中国といった海外とのかかわり方について取り上げた上で、「イノベーションで強い企業、地域を目指すべき」と主張し、その道筋へのヒントを示しました。

その他に、「モノづくりの衰えは考える力の衰え」、「最も強いもの、大きいものではなく、最も変化に敏感なものが生き残る(ダーウィン)」、「速やかに意思決定しなさい、早いものだけが生き残る(韓国ポスコ鄭会長)」といったモノづくり企業における経営姿勢の教訓事例を挙げ、あすめし会のメンバーは、この教訓を真摯に受け止めていました。

一方、荒川区企業団体と米沢地域企業等の交流と

いう観点について「ミニ荒川区」構想を提案しました。これは米沢・会津地域の中に「ミニ荒川区」をつくるというもので、具体的な連携案としては東京の荒川区で企画・営業を行い、豊かな土地を持つ米沢・会津地域が生産を担うというものです。米沢・会津地域では既に沖縄市、遼寧省丹東市(中華人民共和国)、バイエルン州エアランゲン市(ドイツ連邦共和国)、フィンランド共和国とも連携を行っており、各地域の強みを生かして異文化を繋ぐ、重ねる、組み合わせる、補完するといった新たなイノベーションネットワークを形成しようとしています。今後は、このようなネットワーク経済圏(飛び地合併都市)同士の競争が起こることが予測されており、「斬新な改革・手法を取り入れていかないと、生き残っていけない」と強調しました。

講演後、この内容を踏まえた上で、両地域において今後どのような交流ができるか等についてディスカッションが行なわれました。



米沢市の企業とのディスカッション風景

参加企業からの感想

米沢視察研修に参加した「あすめし会」会員からは、次のような感想が聞かれました。

- ・荒川サテライトを利用して山形大学の教授や企業同士で交流を深めていきたい。
- ・山形大学内の研究室での技術相談や米沢地域企業の工場を見学してみたい。
- ・今回会った米沢地域企業と具体的に提携できるのか、その可能性を探りたい。
- ・次回は米沢地域企業の方々に荒川に来てもらい、自社工場を見てもらいたい。(報告者：高村)



あすめし会の発表風景



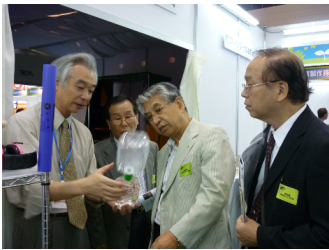
参加者全員の集合写真

# 「健康福祉ビジネス研究会」 活動報告

「健康福祉ビジネス研究会（略称：健ビ研）」では、健康福祉関連の新商品開発に向けて、参加企業の新商品開発コンセプトを確立するために、9月～11月にかけて視察会・定例会を計3回実施しました。

「第37回 国際福祉機器展 H.C.R.2010」視察会  
9月29日(水)、東京ビッグサイト・東展示ホールにて開催された「第37回国際福祉機器展」に会員企業12社で視察を行いました。同展は、日本で最大かつ最先端の福祉機器展です。今回の視察会は、各社の新商品開発コンセプトの確立に向けて、そのヒントを啓発することを目的として実施しました。

展示会の視察の後、見学に参加できなかった企業も加えて、意見交換会を行いました。参加企業からは、「入場者の多さに驚いたとともに、今後の健康福祉分野のビジネスチャンスの大きさを認識できた」といった声が聞かれ、新商品開発に向けて意欲を燃やす企業同士で熱い想いを語り合いました。



福祉機器展視察風景



視察メンバー集合写真

## 第4回健康福祉ビジネス研究会

10月5日(火)、産業経済部4階研修室にて、定例会が開催されました。冒頭、健ビ研の顧問である首都大学東京 健康福祉学部 新田収教授から、「当会からの新商品誕生に向けて、できる限り協力をしていく所存です」と挨拶がありました。

続いて、健康福祉分野の新商品のマーケット及びヒット商品について専門家から学ぶため、株式会社プライムサービス三縄浩司代表取締役より、「ヒットする健康福祉関連商品の開発」と題して、福祉用



首都大学東京 新田収教授



講演する三縄社長

具の医療機器の違い、福祉用具の流通の特徴、売れ筋商品の見極め方、現場の商品ニーズ等についてご講演をいただきました。

この講演の内容を踏まえて、9月29日(水)に行われた国際福祉機器展の視察会を経て提案された3つの新商品アイデアについて、グループワークによる討論を実施しました。

グループワークでは、3つのグループに分かれて、まず発案者より新商品のコンセプト説明が行われました。その後、商品化の可能性、疑問点、改良点について様々な議論が展開され、最後に商品化可能性について評価を行いました。



## 第5回健康福祉ビジネス研究会

11月11日(木)、産業経済部4階研修室にて、定例会が開催されました。冒頭、新商品開発の成功ポイントについて、豊泉シニアコーディネータから説明がありました。

この後、第4回の研究会に引き続き、新商品開発についてのグループワークを実施しました。まず、プレゼンター2社による開発コンセプトのプレゼンテーションが行われ、その後、2グループに分かれて商品開発についての問題点、改良点などについて討論し、最後に参加者全員で商品化の可能性について評価を行いました。

今後は、商品化の可能性の高かった2社の企画案を基に、産学官のネットワークを活用し、発案企業と協力企業が中心となって試作・製品化・販路開拓等を経て新事業の創出を目指します。

(報告者：中村)



# MACCコーディネーター TOMMYの部屋 VOL.14

## 😓「荒川労働時間物語」😓

MACCシニアコーディネータ 豊泉 光男

秋も深まるとコンクリート・ジャングルといわれる大都会東京にも、そこそこに、艶やかな赤色の紅葉や銀杏並木の黄色のトンネルが現れます。

さらには、無機質なアスファルトロードも見事なブラウンのパッチワークを敷き詰め、カサコソの優しい音楽まで奏でています。秋は都会に木枯らしを吹き付けるだけでなく、忘れかけた自然をたっぷり届けてくれますね。仕事に明け暮れ奮闘している企業戦士達にも、ホッとする季節の便りになっていきます。日々、多忙を極めている社長でもこの時ばかりは「忙中閑あり」ということわざを思い出すのではないのでしょうか。

さて今回は、その忙しい社長（企業トップ）の労働時間について考えてみたいと思います。会社の社長は、とにかく忙しい。まずは来客・お客様訪問、次に社内の様々な決裁、打ち合わせ、業界・公職の会議、加えて社長はプレイング・マネージャーとしても、営業・製造・経理・総務・IT実務を兼務している場合が多いのです。とにかく目が回る程忙しい。失われた20年とかリーマン・ショックの今は、もっと忙しい。受注拡大と資金調達に多くの社長は奔走しているのです。このような時期、社長は一体、一日に何時間働くのであろうかとふと考えるのは、私のように社長業を離れて早6年を過ぎ、一步外から見られるようになったから言えることがもしません。皆さんは何時間働いていますか？

経営者としてその渦中にいるときは、社長の労働時間について、その多忙さゆえになかなか本人も自覚していない事が多いと思います。そして社長の多くは、問題解決のために何時間かかっているかを調べる時間があれば、もっとその解決の時間に振り向きたいと感じるものであります。正直、私も何時間働いたかを考えた事はなかったものです。次々起こる問題や課題をどうやって解決するかに意識は費やされ、奔走している間に時間は過ぎて行き、とても8時間では足りません。あまりの熱中さに、昼食を

忘れ、気が付くと夕食も過ぎ、夜食時間になって慌ててコンビニに駆け込むこともしばしばありました。

また移動の電車は、絶好のアイデア創出の場所です。座るやいなや早速、手帳を取り出し、次々に湧いてくるアイデアを使い慣れたいつもの黒い手帳に書き込みます。頭を上げて、車窓を眺めるとそれが刺激となって、アイデアが浮かぶ、それを練成してまた書き込む。はたと気が付くと電車は、降車駅を3つも過ぎていたこともありました。やれやれ引き返すには大分ホームで待つことになりそうです。仕方ない、ホームの立ち食いそばで腹ごしらえといきますか。今日は業界の会合まで、まだ時間があります。そばをかき込み東京行きに飛び乗りましたが今度の車両は、暖房が効いてとても車内は暖かい。そのため、身体は強烈な睡魔に襲われます。ハッと目が覚めると降車駅のアナウンス、急いでドアから車外に脱出しました。私は、こんな社長の労働時間を体験していました。

さて、ここで3つの事例をあげて労働時間についても少し考えていきたいと思います。

先日、あすめし会（MACCプロジェクト分科会・若手後継者13名）の課題図書に選定した本がありました。初回は法政大教授・坂本光司氏の「日本でいちばん大切にしたい会社」です。この中で、企業の社会性、ある意味の優しさの気づきを感じとってもらいたく選定しました。

2冊目は日本電産社長・永守重信氏の著書「情熱・熱意・執念の経営」でした。こちらの選定理由は、企業経営の成功の裏にある厳しさの本音に気付くことができる図書だったからです。永守氏は一代でグループ売上5860億円、営業利益780億円（売上高利益率13%）、従業員96,



「情熱・熱意・執念の経営」  
日本電産・永守重信 著  
(PHP研究所)

000人(2010年)を達成しました。著書の中で社長としては、一日も休まず365日働くと言い、講演会の依頼も引きも切りませんが、顧客訪問・国内外の子会社、工場訪問と休みなく活動しているので、講演会の依頼を断ることが多いと言います。この長時間にわたる勤務時間を元気にこなすには、一体何が支えになっているのでしょうか。さらに、自らにも厳しいが社員にも厳しく接することが多い同氏について、長時間労働も惜しまない社員の胸の内はどうなんでしょうか。

私は36歳で社長に就任し、社長のあるべき姿を追い求め、理想の社長像に近づくため、読書・講演会への出席・出会いの場への参加を積極的に行いました。

中でも、松下幸之助翁の主催するPHP研究所(京都)は、経営の真髓を感じ取るには十分でした。松下幸之助翁曰く、「成功する秘訣は、成功するまで、あきらめずに続けること。諦めたら失敗。」「成功するための妙案は24時間、寝ても起きて、食事中、トイレ中、ずっと考えてる。それは苦痛ではない、良い案が浮かんだ時の無上の喜びは、何ものにも代えがたい喜びである。」と言います。何時間働いても嫌にならない労働って、あるのでしょうか。

4年前にキャリア・コンサルタント(財)社会生産性本部)の試験に何とかパスしました。その勉強の際に、働く事について多くを学びました。中でも新鮮だったのは「ワーク・ライフバランス」です。仕事が、家庭かと言う二者択一ではなく、人間の幸福は二者の両輪のバランスを取っていくことで達成できるという考え方です。社長の24時間が全て、企業の仕事に費やされた時、人間として果たして幸福になれるのものなのでしょうか。会社の中では社長ですが、家庭では夫であり父親でもあります。また、同時に地域社会での役割も果たしていかなければ、退職後は偏ったいわゆる「濡れ落ち葉症候群」になってしまう恐れもあります。そして何より、トミーが経験したように無理な労働は健康を脅かす要因ともなり得ます。皆さんは「ワーク」と「ライフ」のバランス、とれていますか？

ここまで読んでいただき、皆様はどこに共感し、どこが承服できないでしょうか。

貴方にとっての社長の働く時間は・・・？

決まっていますよね。どんな社長を目指すのか、どんな人生を歩みたいのか。それによって、各々の社長が考えて決めていくことですよ。自分の人生は、自分で決めるしかないのでありますから。

それでは、また次回。GOOD LUCK!



あずめし会(若手経営者育成会)



#### <発行>

荒川区産業経済部経営支援課

MACCプロジェクト事務局

〒116-0002

東京都荒川区荒川2-1-5 セントラル荒川ビル3階

TEL:03-3803-2311 FAX:03-3803-2333

E-mail:macc@city.arakawa.tokyo.jp

URL:http://sangyo.city.arakawa.tokyo.jp/macc/